顕元初本尊開示抄

　　　　　　　　　　　　　上野　博隆

　　宣言

　内証にて２００９年３月１日、末法終わりて元初と名付け、本尊を顕す。

　それを広く開示するなり。諸法実相に則りそれを記す。

　　　　　　２０１６年５月３日

　　　（改定２０１９年３月１８日）

　しかして、御書に文証を探し記そうと思えども、元初は、これ新しき時代、新しき実相、法なり。よって、我の実観と明見に従い記すことを許し賜え候。

　　相を記す。

　生死一大決心しこれを欲重し宣言するなり。

　末法の時代は終わったか。日蓮大聖人の誕生を１２２２年２月１６日とすると、それから、私が元初を告げた２００９年３月１日まで７８７年、誕生が末法の開始を告げるなら、末法の終焉まで７８７年経ったことになる。

これは、終焉を告げるのに十分な時間がたったことに成る。

　末法とは、釈迦の説いた仏法の功徳が消滅、隠没する時に始まり、日蓮大聖人の仏法が知れ渡るをもって終焉とする。

　しかし、末法が終わった明らかな証はない。世相を見るに、自然災害やまず、人性悪化やまず、病疫やまず、末法どん底極まれり。

　これは、新しい時代が必要な相である。

　末法は、最初の五百年は変わらず。後の五百年においては、一念を持ったものが宣言し終わらすべし。

　どんな理義、疑義があろうと、結局は自身の一念で時代を変革し確定せん。妙見により、大聖人の本懐である末法の題目を広めることは成就したなり。考え見れば、今までに広宣流布したは、何回も機会あり。大聖人様の生きている時にも達成され、日本国民一同に信じたりは、明白なり。優しい雨が降るのは、達成の証である。しかし、人の心は移ろい安い、信じては疑い、疑っては信じる。それを確定させるためには、末法を終わらせなければならない。私は、そう考える。

　私は、命の続く久遠において、今も過去も大聖人様の仏法を学んだ弟子である。末法を終焉させ新しい仏法を広布するのは、弟子の本懐であると悟る。

　今、相として末法終焉、元初であると宣言し、新しい時代、新しい本尊、新しい仏法を広布する始めとなす成り。

　　性を記す。

　宗教は、民心を救うために生まれたが、宗教団体の争いが戦争を生んで来たのも事実です。今、民心に求められる法は、利他を拝する法である。仏法に擣簁和合（**とうしわごう**）と言う言葉がある。幾つかの効能を持つ薬を擦り合わせ一丸と和合させて最高の薬を作るという意味です。私義で解釈するならば、統一し物事を始め、新たに出発し、和合する法が求められている。（擣簁和合の義）

　そこで、私は宣言した。諸法実相の本末究竟等する根底にあるものは、宇宙の始まりからある心。南無妙法蓮華経である。

　今を久遠とし、「宇宙の始まりの心の名前を南無妙法蓮華経。元初の題目とする。」未来から過去のものに名前を意義付ける。過去を変える義なり。（久遠名義の義）

　「宇宙の始まりの心」と印すは、始まりに在った心は、今も在るからである。全て、この心より始まった。それをもって皆是仏法と成し、全ての法を尊び尊重するのが時代の要件である。（皆是仏法の義）

　２０１４年９月３日に、全て法は、宇宙の始まりの心、南無妙法蓮華経から発した。故に仏法から見ても尊いとする。と宣言した。（立正宣言の義）

　次に、歴史から人間には、仏の心、神の心、魔者の心が存在していることを広く理解するように成った。（見於三界の義）

　詳しく述べると、仏の心とは、人を愛する心。悪に作用すると、身近な人のみに愛情を多く注ぐ愛情過多を起こす。神の心とは、人を導き支える心。悪に作用すると、人を自分の思うように支配したがる。魔者の王の心とは、欲望を支配する。悪に作用すると、自分の利益のある欲望に振り回され、欲望に溺れる。

　元初の南無妙法蓮華経は、全てを善に帰依させることである。

　日蓮大聖人の仏法では、十界互具を説き、生命は、日々、目まぐるしく動く。それを仏界の御本尊と縁することによって脱すると説いた。

　元初において、私が顕した本尊は、三界を明見する。つまり、仏界の心とは、より多くの人を愛していく。神界の心とは、自身だけでなく、他の人も良い方向に導き支えていく。魔界の王の心とは、外界の欲望に負けずに、善へ欲望の方向を向ける。よって、十界互具を脱する。（如来明見の義）

　この三界の明見を、宇宙の始まりの心は、元々持っていると説く。もう一こと言うなら、その心の持つものは、仏の明見であり。仏の心の相である。

　結論を言うと、今節、時代は、「擣簁和合の義」と「如来明見の義」を欲する性である。

　　体を記す。

　本尊に記されし神仏は、全て五体であり、働きを現わす。中央にある元初の南無妙法蓮華経は、心なり。

　　四天王を記す。

　本尊の四隅に、大広目天王、大多聞天王、大増長天王、大持国天王を記す。

　持国天は、東方を守護する。東方とは、神仏の国なり。天の国である。広目天は、西方を守護する。西方とは、理の国なり。西方浄土、科学の国（先人の国）である。多聞天は、北方を守護する。北方とは、俗界の国なり。増長天は、南方を守護する。神仏の子の国なり。銀河である。

　働きを記す。持国天は、信仰する者を守護する。広目天は、衆生（民）を見る。多聞天は、法を聞く。増長天は、煩悩を離れる。

　体の機能を記す。広目天は、腕の骨。多聞天は、足の骨。増長天は、胸骨。持国天は、背骨です。

　　諸天善神を記す。

　狭義の諸天善神を肉体の周りに記す。

　天照大神は、日本古来の神。仏法が伝来したとき、仏法を行ずる者（信仰する者）を守護すると誓った。今、虚空会の儀式で善に帰依すると誓った。恵みの太陽、恵みの心。

　焼の如来神は、煩悩を焼き滅する。善に背く心を焼却する。情熱の心。自身の世尊を一番尊ぶ心。

　光の如来神は、太古の種族。光をもたらす。エネルギー、魅力、容姿、全てを形作る。

　闇の如来神は、太古の種族。宇宙は、光と闇から始まったとする最初の種族。人の心を癒す。欲望を制御する。

　水子地蔵は、世の中に生まれて来れなかった子、また、親より早く死んだ子。生気を吸い、福運を食らった。しかし、「同じ親の元にもう一度生まれたい」と願った。その願いを仏法の行者が聞きとどめた。「福運は、人のために使うものと、全ての福運をあげる」との言葉に感動して、自ら善を行ずる子になると誓った。子の親に対する愛情を表現する。

　口結び子は、下呂を食い、生をつないでいた東の衆生。仏法を信じたが、法華経の行者を誹謗した因により餓鬼界に落ちていた。しかし、阿弥陀仏様が法華経に帰依するとき、一緒に成仏した。嘘をつかず真実の口を結ぶ。

　妖精は、神仏に仕える人の気持ちが伝わり神仏化した。もの、生き物、自然、大地を愛する心。

　天使は、神の使いとして自然を操り、神に逆らう者を罰してきたが、全宇宙が滅びかけたとき、一人の救える者を選ぶ。その時、仏法の行者を選び救った。そのアルマゲドンの中、人を裁いてきたが、自分自身を裁き、善を行ずることを誓った。神仏の使いとして行ずる心。

　死の神仏に、「光の民」と「闇の民」と「菩薩」が集いて成る。一に死神あり。二に病魔あり。三に物の仏あり。四に人形の仏、五に悪魔。六に冥途の国。

　一に死神。

日本の死神。法華経の行者を守護するために影に隠れ、人を殺していたが、殺生の罪で重く心をふさいでいた。しかし、「自ら行事なさい」との言葉を聴き、目が覚め、自身が仏法に背いていたことに気づいて、善に生きることを誓った。殺生を断じ。罰する悲しみの心。後に菩薩となる。西方浄土に住む。

西洋の死神。近代の死神。死を司る神であったが、魔族の王が仏法を信じた時、生死を司る菩薩になると予言がありそれに従う。死を司る国で暮らす。

ハデス（地下界の王）と住民。死を司る国に菩薩と菩薩に従う民として暮らすこととした。

　二に病魔。

病のウイルスを身に宿す。因に従い病を送っていた。魔族の王が立教した時、死を司る菩薩に成る。身のウイルスは妖精になる。ただし、死を司る国でのみである。病魔で死んだ動物や人間はその国に生まれる。

三に物の仏。

はじめて、仏法者が悪魔を仏法に帰依さした時、力を授かった。その力で街を清掃する菩薩を生みだした。仏法者が立経したとき、物の仏の国の住人となった。ゴミを自然に帰依させる。きれい好きな同名天も暮らす。海のプランクトン。妖精に生まれる。ゴミを食べて死んだ動物や魚等は、物の仏の国に生まれる。鉄に当たって死んだ動物や魚も物の仏の国に生まれる。

四に人形の仏。（人形の死を司る）。

キルケーは、気に入った人間の男や女性がいると島に連れて行って養い、飽きると魔法で獣や家畜に変えて暮らしている。夜は獣人と昼は光あるとこでは人形に変えられた。店小屋で働かせていた。

しかし、一人の仏法者と知り合う。いろいろ嫌がらせを仏法者にしたが、仏法者は、忍耐し獣人を哀れに感じた。獣人もキルケーもその心を知り、信仰をすることを誓った。

そして、仏法者が立経したとき、人形の仏に成った。キルケーは、人形の女神になった。男の獣人は、性の良いものは人形の仏に、悪いものは女性の獣人になった。人形の仏は、人形を成仏させ物の仏の国に住まわせる。いなくなった男の獣人は、新たに因のある人間を魔族が契約させた。

五に悪魔。

魔族の王が仏法に帰依したため、それに従い仏法に帰依した。よって、因果に則り罪を諫める役目を負う。しかし、罪の果を受けた者が許すか。世尊が許した場合は、罪を許すものとする。

六に冥途の国。

二首竜と乱暴者の国。罪を犯して死んだ人を冥途に連れていく。被害者の記憶の無限地獄に落とす。仏法者が立経した時に、人の姿となり、冥途の国は生まれ変わる。

※全て魔族（Night Godの種族)とする。「元初の南無妙法蓮華経」に受持し善に生きることを誓った。罪あれば、諫めることを許す。

　十羅刹女は、子なり。弟、妹。親の言うことを聞く。親、仏に従う心。　鬼子母神は、母親の心。後にサタン（魔族の母）も角を折られ仏法を信じた。阿修羅は、闘争心。軍隊もこれにあたる。　八幡大菩薩は、国を守る心。王法守護。八大竜王は、自然なり。

　諸天善神の体の機能を記す。肋骨なり。

　大は、集を表し、王は、主を表す。

　本尊に、天王如来、十羅刹女を記すは、男に女性の心あり。女性に男の心あり。男女対等を現わすなり。

　聖霊、転輪聖王は、神仏の使いをし信仰する自身の姿である。故に、諸天善神に記さず。されど鎖骨なり。自身の信仰する心なり。

迹門の四菩薩を記す。

迹門の菩薩の力を共有する。文殊師利菩薩は、記憶、知識を司る。脳の記憶。普賢菩薩は、穏やかに賢い菩薩。理、真理を極める。悟り、顕本を司る。脳の思考。薬王菩薩は、体に良薬を成す。経や題目に反応する。甲状腺。観音菩薩は、大慈悲、人の苦しみを知り救おうとする心。

釈迦牟尼仏は、世の親なり。仏法の親なり。親の徳を意味する。

　　本門の四菩薩を記す。

　上行菩薩は、我、唱える我。無辺行菩薩は、一切法これ仏法、法に境がないこと。浄行菩薩は、心は洗われ清くなる。安立行菩薩は、安らかなる心。苦難を楽しむ。乗り越える。

　本門に四菩薩ありしかど、日蓮大聖人の一身に働きを有する。本尊には、日蓮如来仏と記す。東に生まれ住する名前。末法に、南無妙法蓮華経を広めた大聖人の名を有し仏を代表す。慈愛、無明を照らす。師の徳を意味する。

　　三界の王を記す。

　仏界は、釈尊、日蓮如来仏なり。神界は、アラー。イエス・キリスト。魔界の王に、ナイト・ゴットを記す。

　アラーは、焼の如来神の王である。イエス・キリストは、光の如来神の王である。ナイト・ゴットは、闇の如来神の王である。天皆尊は、日本、世界中の自然界の神をさす。自然界を尊ぶ心である。　海外の神。ゼウス（天空神）、ポセイドン（大洋）、ケッアルコアトルを含む。

　　月天、日天、明星天を記す。

　月天は、太陰。衛星。日天は、太陽。恒星。明星天は、星。惑星。体の臓器を表わす。

　御本尊は、生命の相である。人の宇宙は、臓器とエネルギーと生命の論理構造である。

　海外の神。セレーネー（月の女神）。ヘーリオス（日の神）。エーオース（曙の女神）。

　　梵天、帝釈天、第六天魔王、天王如来を記す。

　梵天は、領土を治める。色界。政治家。有力者。帝釈は、東の守護神、免疫、悪を退治する。警察。第六天魔王は、体に住む細菌。病魔の神王。欲界。天王如来は、提婆達多（ユダ）が、罪をつぐない生まれ変わった姿です。蓮華の座に記す。師、親を超える気持ち。提婆達多の心は、上に逆らい悪を成す。

　　阿弥陀如来、無量寿仏、無量光仏を記す。

　阿弥陀仏が法華経に帰依したことを明らかにする。働きは、無量寿仏、無量光仏なり。

　無量寿仏は、「前に向かう気持ち」、細胞の新陳代謝。無量光仏は、エネルギーの受け取り蓄積と発生を司る。

　　宇宙全体を記す。

　東閻浮提、西閻浮提、南閻浮提、北閻浮提を中央の下に四方を記す。南を上とし北を下とする。

　その中央に、太陽の四聖人を記す。アラー、日蓮、アクテイス、イエス。天皆。そして、自身の名、博隆を記す。

　　天空に七分を記す。

　我が本尊には、「福十号」「頭破七分」はありません。理由は、過激な布教を重んじず、自身の変革、社会貢献を重んじるためです。また、「魔をも諸天し自身に治める」とするため頭破七分を用いない。ただ、七分の者は、縁ある故に頭上に記す。

　　以上、この明見は、東行せしときの話しもあり、約束もあります。末法が終わって、全ての神仏魔を活かす法である。

　　力を記す。

　御本尊の力を記す。題目の名字同じ故に、末法の題目の力を御本尊に受ける。しかし、末法では、題目に全ての力が有ったにたいして、元初では、各々の神、仏、菩薩、如来、題目で力を分け、本尊全体で力を発する。

　　二十一の義

1. 生　（命を生む、生きる心）
2. 善　（悪を断つ）
3. 蘇　（蘇る）
4. 湧　（知恵、エネルギーが起こる）
5. 記　（記憶）
6. 明　（明鏡、明見）
7. 無量（無限、無量、永寿）
8. 浄　（浄化）
9. 発　（発生、発生源）
10. 蓄（蓄積）
11. 支（支える）
12. 導（導く）
13. 愛（愛する、愛される）
14. 越（超える）
15. 引（引力）
16. 悟（悟る、覚悟）
17. 知（知る）
18. 燃（煩悩、情熱を燃やす）
19. 抑（抑制）
20. 安（安らか）
21. 滅（死、消滅、離れる）

　　次に四大神の力を記す。

　　光の力　　肉を作る。大地を生む。

　　闇の力　　癒す。源。無から有を生む。

　　焼の力　　因を燃やす。

　　天照の力　恵み。

　ただし、神は守護するが、神通力は、神の許しなくば使えず。

　他宗の世尊を冠するのは、「我に力を与えたまえ、さすれば、汝の主、汝の民を守りたまわん」の約束があるからである。

　　作を記す。

　見於三界。如来明見。

　身に神魔佛人在りと悟りて、善と一致するなり。

　苦しみ、病気、貧困から脱出する心を作る。

　この御本尊を唱えれば、全ての神仏を活かし、自ずと四界を善に導き、全てを叶える。

　　光と影

　この御本尊は、光と影である。

　光は、作用である。自身から発するエネルギーを受け、光を発する。自身にも影響するし、環境、周りにも影響（作用）する。

　影は、果である。自身の姿である。影も御本尊のとおりの体を持つ。つまり、自身の体も、社会も、御本尊のとおりの体となる。

　　因を記す。

　作用は、主に次の因となる。仕事が成功する因。病気が治る因。家庭が円満になる因。男女対等の因。すべて善の方向に向かう因。社会変革の因となる。自己変革の因。

　　縁を記す。

　リレーション（関係）です。影響を受けた人と、血、肉骨の縁を結ぶ。しかし、縁を結べば、宿業を分けて背負う。同体同心。

　体は体の連携。精神は精神の連携。本尊は、本尊の連携。宇宙は、宇宙の連携。宝塔は、宝塔の連携。

　関係と言ってもＳＥＸではない。

精神のリレーションである。縁である。

縁には、「過去世の縁」と「現世の縁」がある。

１、過去世の縁

・生まれる時に縁を決める。肉骨を分かち合い生まれてくる。

２、現世での縁。

・汝に肉と骨を与え血の縁を結ばん。言葉通り、主体が現在で縁を結ぶ。もしくは、世尊が縁を結ぶ。

３、肉体の与え方について。

（１）肉骨を与えるのは主体である。

（２）ネットワーク型である。

　　・宗教が違っても複数の人とリレーション出来る。なぜなら、精神の連携。過去世や現世の縁である。現代社会は、社会、宗教、文化（スポーツ）等で立場を分ける。故にあなたにとって複数世尊が存在する。

（３）諸天

　　・言うまでもなく、諸天は対等である。諸天には直接リレーションする必要はない。

　　　しかし、力を与えられた場合は、世尊と認めるものとする。

（４）主体と民との肉骨の与え方について。

　　・主体に体あり、民に体あり。

　　・主体の形を変えない場合、民が認めれば、主体の肉、骨を得ることができる。

　　　変える場合は、主体も認めなければならない。

　　　主体は、民が主体を認めれば、民の体を変えることができる場合がある。

　　・縁を離れる時は、主体に罪がない場合は支障のない程度に離れる。

　　　罪のある場合は、因により肉や骨を取られても仕方ない。

　　　罪とは、主体が民を裏切る場合です。

（５）体は、自然に変化する。

　　・民の体の変化、主体の体の変化は、自然に影響し落ち着く。

　　・世尊であっても民の縁を削ることは出来ない。

　　　ただし、民が主体を裏切り、因を作った場合は、主体は民と支障なく縁を切れる。

　　果を記す。

　理想の社会。真実の社会。

　平等（評価、競争、機会）

　公平（価値、評価、公開）

　人に優しい社会。人間味のある社会。善に帰する社会。

　別の視点で記す。

　平和、教育、福祉、金融、保証（信用。特許。安全）、文化、環境、生活（保護。支援。健康。）

　　報を記す。

　本位に導かれ、自分のやるべきこと、あるべき姿を悟る。

　幸せになる。願いが叶う。福運がつく。

　財務。裕福。健康。苦しみから脱する。

　苦病貧から脱する。

　以上。諸法実相に則り記しました。

　　御本尊の文字の相を述べる。

　ワープロの文字を使用するのは、人に依らず、祈りによるため。よって、私の祈りを込めている。題目の文字の相は、心が安穏なるを示す。

　　元初の題目の功徳。

　名字同じ故に、１００％ではないが功徳を得る。御本尊の功徳は、末法の御本尊に負けない。自身、社会の変革にある。

　　世尊を中央に置く。

　この御本尊は、光と影に故、各宗、各宗教で、各世尊を中央に置くべし。世尊が像の場合、形が心に影響するが、自身を律し心を置くこと。

　　唱う題目。

　信じ難いが、他の王を唱えるべし。その故は、御本尊に記し、力を借りしからである。

　元初の題目を広める者は、心の名と二界の王を唱えるべし。

　南無妙法蓮華経。南無阿弥陀佛。南無釈迦牟尼佛。南無は心の名であることを示す。

　アーメン（区切り）。アラー。イエス・キリスト。

一界の主の魔界の王は、名無き故により唱えない。天皆尊を唱える。（自然を敬う心を成す）※順は、各信仰により変更できる。声に出さなくても良いこととする。声にだしても良い。

　最後に各世尊の題目を唱えるべし。

　　元初の南無妙法蓮華経の唱え方。

　「なむみょうほうれんげきょう」と唱える。

　リズムは、大白牛車を引く牛のごとく「パッカパッカパッカ」と唱えるべし。御本尊の「妙」の字に向かって唱えるべし。

末法久遠如来は、「なんみょうほうれんげきょう」と唱えることを許す。

　人と人のネットワークについて

人の感覚(５根)・精神・意識(心）・リズムが一致することを言う。

１、一致とは、

　・常に一致しているわけではない。

　・常に一致してないわけでもない。

　・必然な時に一致する。

　・不要な時は一致しない。

２、感覚の一致とは、私が民を思う心が民の苦悩(痛み等）を感じた時、民が苦悩し(痛み等）をうけ、私を必要とした時、苦悩（痛み）を分け合う為に感覚が一致する。

３、精神の一致とは、私と民の精神が一致した時、民は、その精神を実現する為に、知識（物事（森羅万象の現象）を正しく理解した実体の情報）を共有し、知恵（真理に即して、正しく物事を認識し判断する能力）が湧き、発想（具体的に精神を実現する方法を生む）し、それを実現する行動をとる事を言う。

４、意識の一致　リレーション関係にあるものどうしの意識は影響しあう。行動は、意識の作用を受ける。しかし、主体の方が強い意志（意識）を持つ。

５、ネットワークの主体(私：サバー)と民(クライアント)との関係について

　（１）民と民の場合、両方、自分が主体である。

　（２）私と民の場合、

民が私を主体と感じたとき、私は主体。

　　民自身が主体と感じ、私も民が主体と感じれば、民が主体になる。

　（３）私と私の場合、両方、自分が主体である。

　※主体の意味は、ネットワークの中心であり、つまり、感覚の集中する地点、精神を発信する地点、リズムを発信する地点）を指す。

６、リズムの一致とは、リズムは、心と行いにあり、その２つは異なるリズムではない。私のリズムと私の民のリズムがだんだん私のリズムに合致していくことを言う。

　つまり、ネットワークとは、そう言うものであり。目に見えない繋がりで外的要因、内的要因によって、動的に主体を認め合うものである。

注）スポーツ競技において、リレーション（関係）にある者どうしによる力の引き合いは、影響を及ぼさない。

　　謗法について記す。

　我が御本尊については、諸天対等とする。それは、守護する神仏を尊ぶ故である。私の方が偉いから守るのは当たり前と言う考えは、元初においてはない。しかし、心第一なり。私心の順番、世尊の尊さは、能々考えるべきなり。善に背けば、悪い因を積むことに成る。

　ここまで、つらつら書きしかど、この御本尊を用いるか、非ずかは、能々吟味して、お考え頂き候。

　　　　　　　　　　　　　　　以上

　「読経」元初では、経を次の様に読み替える。

　　妙法蓮華経。方便品。第二。

　止舎利弗。不須復説。我心本妙。所以者何。

　三回目の如是本末究竟等。所謂。南無妙法蓮華経。

　　妙法蓮華経。如来寿量品。第十六。

　我本行菩薩道。→我本行大善道。

　　自我偈。

　慧光照無量。寿命無量劫。

　以何令衆生。在神魔佛人。善一致。得入無上道。速成就善身。

　　導師が、ゆっくり意味を考え読むこと。